

33. $^{99m}\text{Tc-MAA}$ による肺血流スキャンニングの臨床経験

○北野 保
 (大阪府立羽曳野病院・放)
 姜 臣国 筆本 由幸
 (同・外科)

私達は $^{131}\text{I-MAA}$ による肺血流スキャンを、ルーチン化して行っているが、今回 $^{99m}\text{Tc-MAA}$ を使用することにより、一回のスキャン時間の短縮と、 $^{131}\text{I-MAA}$ と同等もしくは、それ以上の情報量を得ることを目的に次のような実験を試みた。

まず、レバースライス・ファントム (200ml) に ^{131}I と ^{99m}Tc を、普通一般に臨床で用いられる投与量の 10%, 50%, 100%, の 3 種類の濃度の溶液を作り、スキャンスピードを、それぞれの溶液に対して 50cm/分, 100cm/分, 200cm/分, 300cm/分, 400cm/分 の 5 つのスピードで走らせ、それをフォト方式で記録し検討した。

以上の実験より、 ^{99m}Tc を用いて、スキャンスピードを 400cm/分で走らせて得られる像は、 ^{131}I を用いて 200cm/分で走らせて得られる像より各々それ各自的濃度において、 ^{99m}Tc の方が ^{131}I よりも優れていた。したがって ^{99m}Tc を用いれば、 ^{131}I の時よりもスピードアップが可能であるということが出来る。

スキャン時間の短縮は、患者の苦痛を軽減させるのはもちろんのこと、多方向シンチグラム作成を容易にさせ、局所肺血流低下の発見にも有効な手段となり、診断上に必要な情報量を多くする手助けとなると思われる。

34. $^{99m}\text{Tc-EDTA}$ 及び $^{131}\text{I-Hippuran}$ による経時的腎シンチグラフィーの診断的意義

○中西 義明 吉田 祥二 植林 和之
 (神大・放)

各種腎疾患を対象に $^{99m}\text{Tc-EDTA}$ 及び $^{131}\text{I-Hippuran}$ による経時的腎シンチグラフィーを施行し、各々の診断的意義を検討した。

経時的腎シンチグラフィーにおいて腎腫瘍およびその鑑別診断には $^{99m}\text{Tc-EDTA}$ の方が $^{131}\text{I-Hippuran}$ よりもすぐれている。

$^{131}\text{I-Hippuran}$ の方が $^{99m}\text{Tc-EDTA}$ よりも腎内の Tracer の移行の過程がより詳細に観察出来、び慢性腎実質障害の診断には優れている。

GFR 物質である $^{99m}\text{Tc-EDTA}$ と RPF 物質である $^{131}\text{I-Hippuran}$ の二核種同時測定を来うことにより、腎糸球体と尿細管の機能障害の差異が測定出来、定量的評価の可能性を加味すると診断的意義は大きい。

35. 副腎シンチグラフィーの臨床経験

○但馬 浩 笠原 明 田村 陽市
 浦部 愛子
 (大阪赤十字病院・内科)

$^{131}\text{I-19-Iコレステロール}$ を静注後、8日前後で最適のシンチグラムが得られた。

対象はクッシング症候群 2 例、原発性アルドステロン症 1 例、高血圧症 2 例、正常例 2 例の計 7 例である。

高血圧症の 1 例は副腎像を描出し得なかったが、残りの 6 例はいずれも左右の副腎像を描出しえた。

副腎シンチグラフィーに際し、甲状腺をブロックする必要がある。

正常例の 1 例で、両副腎の像は明らかな左右差が認められた。

したがって副腎像の左右差の存在のみでは、病的な意味はつけ難く、福地等もいっているように左右差を量的にあらわして検討する事が必要であると思われる。